

# 社会主義とラマ教

(東京外語大助教授・国際関係論)

(絵と文) 中嶋嶺雄



この冬、ユーラシア大陸を縦断してモスクワ、ウランバートル、北京を訪れる機会に恵まれた。

中ソ対立下の社会主義三カ国を体験旅行するのが目的だった。モスクワでは、昨春この地に客死した中国共産党の三〇年代前半の最高指導者で一貫した親ソ派であった王明が、チエーホフやゴゴリ、最近ではフルシチョフの墓所として知られるノヴォ

デヴィチ修道院墓地に葬られていることを知って、雪のある日、レーニン丘に近いモスクワ河畔の修道院墓地を訪れてみた。王明の墓は大変立派なもので、ソ連当局が彼をいかに手厚く遇していたかを知ることができる。

私は、修道院の方も気に入っていて、モスクワへ来るたびに訪れてみるのだが、その日も堂内を埋めつくした女たちは、悪かれたように祈りながら、キリスト像に手を触れては、その手で額や胸をなでまわしていた。

これほどまでに彼女らが祈らねばならない社会主義とは何なのか。宗教の方は、やはりマルクス・レーニン主義を凌駕するのであるうか。

モスクワに一週間滞在したのち、厳寒のシベリア経由、モンゴル人民共和国の首都ウランバートルに入った。モンゴルは、周知のようにかつてはチベットと並ぶラマ教の世界として知られていたが、いわゆる外蒙の地に「牧民社会主義」の国を打ち建てた現代モンゴルは、聖俗封建制の土壌にラマ教の活仏が君臨した時代と訣別してすでに久しい。それ

だけに、今日のモンゴルでラマ教はどのような姿になっているのか興味を抱いてきたのだが、有名なラマ廟ガンダンテチンリン(慶寧寺)は、いまでもウランバートルに残っている。

日曜日そこに訪れると、屋根に草の茂った廟の前では、中年の男女が独得の礼拝用鉄板のうえに何回も何回も身を伏しては立って懸命に拝んでおり、堂内には、いかにも精悍な面持ちながら全身に苦むしているといった感じのラマ僧たちが、一様に座していた。チベット語の教典をひろげ、無心に読経をつづけているのである。

読経は、インドネシアのガメラ音楽にも似た悠長な調べを繰り返し、様々な「楽器」(木広りの独得の笛、シンバルに似た鑼、鉦、鼓など)の奏でるオーケストラレシジョンによって、無限の宗教的世界に人を誘う。

ラマ教は、いうまでもなくチベット仏教であり、一名「黄教」ともいわれるように、僧侶たちは黄衣黄帽に身をまとい、堂内の壁画やお札の絵のたぐいも、すべて極彩色の黄、橙、朱で統一されている。彼らの祈りは、社会主義のイデオロギーや政治の厳しき、中ソ

とゴビの砂漠、ときたま見かける羊や牛の放牧。点在する駱駝が壮烈な夕日を背に長い影を落とす。かつては樞一雄や山中峯太郎の作品の世界であり、馬賊や大陸浪人が跳梁した舞台でもあったこの広大な空間を、中蒙国境を越え、内蒙古の各駅を過ぎて、SLファンが喜びそうな鈍行の蒸気機関車は、わずか二人の外人客(私とアルガリアの外交官)を乗せて走る。やがて集寧、大同、張家口を経由して北京へ着いた。

私にとって北京は文化大革命の激動期にそこを訪れて以来、八年ぶりであった。北京にはラマ教の古寺院が多い。市内の名勝・北海公園の南寄りにある瓊華島にはラマ教の巨大な白塔が天を突かんばかりに聳え立っていたけれども、現在、北海公園一帯は、近くの景山公園とともに一切立ち入り禁止になっている。毛沢東主席ら中国要人が住む中南海のすぐ近くだからであろう。

私の北京滞在中に開かれた第四期全国人民代表大会は、新憲法を採択して、宗教の自由をひきつづき認めはしたが、今日の中国にラマ教が活きる余地はもはやなさそうである。

絵入ずいひつ



1975.1.4 ウランバートルのラマ廟

両大国のはざまに位置する現代モンゴルの過酷な現実といったものとまったく無関係に、チベットが社会主義中国の翼下に入ってきた。以来、いまではここだけに細々と脈打つラマ教の歴史と伝統を一心に死守しようとしているかのようであった。

私は堂内をぬけ出て、境内の小高い丘からみはるかすことのできる草原の地平を眺め、この地とチベットとの交流の歴史という遠大な過去に想いを馳せざるを得なかつた。チベットといえば、一九五九年のチベット動乱で知られるグライ・ラマの呼称は、十六世紀にモンゴルの再興をはかったアルタンがこの地でラマ教に帰依して布教に努めたとき、チベットからラマ教の高僧を招いて彼にモンゴル語で「海(グライ)の僧侶(ラマ)」という称号を送ったのに由来するという。モンゴルからチベットまでの広大な砂漠と草原の空間は、内陸アジアの遊牧民族にとつて、まさに「海」なのであろう。

ともあれ、ラマ教は、モンゴルにまだ活きている。牧民の葬儀には、ラマ僧が立ち会うとのことも耳にした。ウランバートルをあとにして、三日間の汽車旅で私は北京へ向った。連綿とつづく草原